

バーチャルとリアルな活動の導入が進む就職活動

◆ITやAIの活用が広がる就職・採用活動

2019年3月1日、大学生向けの会社説明会が解禁された。人手不足や4月末に10連休が控えていることもあり、企業は例年より早めに選考を進めている。

就職・採用活動はネットの普及で大きく変化している。会社説明会への申し込みや書類選考、試験・適性検査など、大半の就活プロセスがネット経由で実施されており、学生はスマホなどのモバイル端末無しでは就活が成り立たない。

ネット経由の就活が一般化し、学生が接触する企業数は大幅に増えた。19年2月にリクルートキャリアが公表した調査結果によると19年卒の学生は、平均で27社に資料請求をして13社の説明会に参加し、8社の面接を受けている。

一方、企業が応募を受け付ける、学生や選考書類の数も膨れあがっている。そのため、ITを活用した採用活動が急速に広がっている。WEB上で会社説明会や面接を実施したり、膨大な書類選考の採点や面接にAIを導入する企業も登場している。ソフトバンク、サッポロビール、住友生命がAIを採用に活用し始めている。20年は東京五輪が開催されるため、交通機関や会議室の確保などに支障が生じる可能性があるため、バーチャルなITを活用した採用が加速するという予測もある。

◆バーチャルとリアルな活動を融合させた就職・採用活動に注目

ITやAIなど先端技術の活用が進む一方で、現場を体験するインターンシップ制度を導入する企業も増えている。企業の9割以上が実施していて19年卒の学生は平均5社のインターンシップに参加している。本来、インターンシップは就業体験を意味し、業界や仕事への理解を深めてもらう活動だが、最近は採用を意識して学生の能力を見極めるという活動に変化している。ソフトバンクはAIを活用する一方で、地方創生をテーマに現地で合宿を行い、地域課題をITで解決する施策を考えて、自治体に提案するというインターンシップを実施している。

ITやAIを活用したバーチャルな就職・採用活動が飛躍的に広がる一方で、現場で手間や時間をかけるリアルなインターンシップも増えている。若年人口の減少を背景に人材争奪戦にむけた企業のさまざまな試みが続きそうだ。【新井佳美】